

Title	日本語とビルマ語における格助詞の機能及び体系に関する対照研究：格助詞の交替現象を中心に
Author(s)	トウトウヌエエー
Citation	日本語・日本文化研究. 2017, 27, p. 108-117
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69220
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

日本語とビルマ語における格助詞の機能及び体系に関する対照研究

—格助詞の交替現象を中心に—

トゥ トウ ヌェ エー

1. はじめに

日本語では多様な格助詞の交替現象が存在する。日本語の格助詞の交替、例えば、「に」と「と」の交替やいわゆる「壁塗り交替」などでは、概して意味的対立が見られる。一方、格助詞を有するビルマ語でも同様の格交替が観察されるが、日本語に見られるような意味的な対立は明確ではない。本稿では、このような相違が両言語における格助詞の体系の違いに由来するとの提案を行う。

2. 格助詞の交替における意味的な対立

日本語では、様々な格助詞の交替現象が見られる。しかし、所与の交替が常に可能であるわけではない。例えば、塚本(1991)で考察されているように、「に」と「と」の組み合わせで交替可能な場合と不可能な場合がある。

- (1) a. バスが トラックに 衝突した。 (塚本 1991)
b. バスが トラックと 衝突した。
- (2) a. 自動車が 電柱に ぶつかった。 (塚本 1991)
b. *自動車が 電柱と ぶつかった。
- (3) a. *浩志が 小百合に 結婚した。 (塚本 1991)
b. 浩志が 小百合と 結婚した。

日本語で「に」と「と」が交替できる場合とできない場合があるのには、格助詞の意味が関与している。(1)a.と b.の意味の違いについて、塚本(1991)は、「に」の場合は、バスが止まっているトラックに一方的にぶつかる、というような意味を表すが、「と」の場合は、バスとトラックがともに動いていてぶつかり合うという意味になると述べている。(2)a.と異なり、(2)b.が非文になるのは、電柱が物理的に動き得るという特性を有する名詞ではないため、前者では格助詞「に」が有する一方的な移動の意味合いとは合致するが、後者では格助詞「と」が有する相互的な移動の意味合いとは矛盾するからである。逆に、(3)の「結婚する」という動詞は相互的な行為であり、それゆえ、相互的な「と」は認めら

れるが、一方的な「に」は許されない。

以下に示すように、ビルマ語にも同じような格助詞の交替が観察される。ⁱ

- (4) a. ba'saka: ga. kouN_tiN_ka: **go_** tai'tE_
 バス-ka. トラック-**ko_** 衝突した
 「バスがトラックに衝突した。」
- b. ba'saka: ga. kouN_tiN_ka: **nE.** tai'tE_
 バス-ka. トラック-**nE.** 衝突した
 「バスがトラックと衝突した。」
- (5) a. ka: ga. da'taiN_ **go_** tai'tE_
 自動車-ka. 電柱-**ko_** ぶつかった
 「自動車が電柱にぶつかった。」
- b. ka: ga. da'taiN_ **nE.** tai'tE_
 自動車-ka. 電柱-**nE.** ぶつかった
 (直訳) 「自動車が電柱とぶつかった。」
- (6) a. mauN_mauN_ga. ma.ma. **go_** yu_dE_
 [人名]-ka. [人名]-**ko_** 結婚した
 (直訳) 「マウンマウンがママに結婚した。」
- b. mauN_mauN_ga. ma.ma. **nE.** yu_dE_
 [人名]-ka. [人名]-**nE.** 結婚した
 「マウンマウンがママと結婚した。」

日本語の「に」に相当するビルマ語の格助詞は-ko_で、「と」に相当する格助詞は-nE.である。先の日本語の例(1)~(3)に対応するビルマ語の例(4)~(6)が示すように、すべて-ko_でも-nE.でも文法的である。(4)a.は、ビルマ語でもバスがトラックに一方的にぶつかるという意味になるが、(4)b.のビルマ語においては、自動車とトラックがともに動いていてぶつかり合うという解釈だけでなく、一方的にぶつかるという解釈も可能である。さらに、(6)a.が文法的であることから、-ko_の一方的な意味合いもそれほど堅固なものではなく、また、(5)b.が自然であることから、-nE.は方向性について-ko_とかならずしも対立するものではないと思われる。つまり、日本語の格交替では、意味の対立が顕著に表れているが、ビルマ語の格交替では、それが希薄であると言える。これは、日本語で文法性の鍵を握るのは、格助詞であり、言わば、格助詞が強く自己主張しているからだと考えられる。一方、ビルマ語は、格助詞は常に特定の意味に限定されるわけではなく、その意味合いは動詞や

文脈に依存している。別の言い方をすれば、日本語の格助詞は自立性が高く、ビルマ語の格助詞は自立性が低いということになるだろう。では、なぜ日本語とビルマ語で格助詞の自立性の度合いが異なるのだろうか。そこには、両言語の格助詞の体系が関係している。

3. 格助詞の自立性と体系

鈴木(2015)の表を利用して、日本語とビルマ語における格助詞の体系・機能を対比させると表1のようになる。これを見ると、ビルマ語の基本的な格助詞は、日本語より数が少ない。日本語にも格助詞「に」のように幅広い機能を担うものがあるが、相対的に言って、ビルマ語の方が日本語よりも一つの格助詞が担う機能が多いことが窺える。

表1 日本語とビルマ語の格助詞

日本語	格機能	ビルマ語	
が	主格	-ka.	「時点格1」：過去の時点
から	奪格		
(に)	時点格1		
を	対格	-ko_	「時点格2」：未来の時点
へ	向格		
に	与格		
	時点格2		
で	於格1	-hma_	「於格1」：存在場所や時間 「於格2」：動作の場所
	於格2		
と	具格	-nE.	
の	共格		
まで	属格	-yE.	
より	到格	-athi.	
	比格	-thE'	

ビルマ語と日本語の格助詞を意味機能の観点から対応させると次のようになる：-ka.=「が、から」、-ko_=「へ、に、を」、-hma_=「で、に」、-nE.=「と、で」、-yE.=「の」。ここから、日本語ではビルマ語よりも格機能が細分化していることが見て取れる。細分化の度合いが高いほど、各々の格はその独自性や自立性を高めることになり、結果として、格の交替においては、意味の対立が顕著になるのだと言える。

また、ビルマ語の **-ka.** と **-ko_** について言えば、主格や対格（・与格）といった、いわゆる文法格と、奪格や向格のような、いわゆる意味格との両方にまたがって、幅広い意味機能をもっている。日本語で「～が」と言えば、それが文法格であり、主格であると特定でき、「～から」といえばその名詞が起点の意味役割を担う意味格であると解釈され、両者が明確に区別されている。ところが、ビルマ語の「**～-ka.**」は、主語であることを示すのか、起点を示すのか（過去の時点を示すのか）は、それだけでは判断できない。それを特定するためには、それが付随している名詞がどのような意味素性を持っているのか、どのような動詞や名詞句と共に起しているのか等を知る必要がある。もちろん、日本語の「が」が常に動作主を表すわけではなく、その具体的な意味役割の特定には動詞が必要であるが、すくなくとも、それが主格という格機能をもつものであり、「から」のような意味格でないことは、その形式から明らかである。

次の格交替では、そのような文法格と意味格の峻別に関わる両言語の相違が関係している。

- (7) a. 太郎が バスから 降りた。
 b. 太郎が バスを 降りた。

例(7)のような日本語の格交替について、塚本(1991)は、「移動を表す表現の内の「出どころ」を表す表現において、源泉の意味役割を担う補語は「を」で表示されるが、移動の起点を表しているので、「を」は起点の意味を含有する格助詞「から」と一般的に交替可能である」と述べている。一方、例(8)で見られるように、ビルマ語では **-ka.** と **-ko_** の交替は不可能である。

- (8) a. mauN_mauN_ga. ba'saka: **ga.** shiN:dE_
 [人名] **-ka.** バス**-ka.** 降りた
 「マウンマウンがバスから降りた。」
 b. * mauN_mauN_ga. ba'saka: **go_** shiN:dE_
 [人名] **-ka.** バス**-ko_** 降りた
 「マウンマウンがバスを降りた。」

日本語では、「から」が「を」と交替可能であるが、ビルマ語では **-ka.** は **-ko_** と交替することができない。これは、ビルマ語の **-ko_** は、元来、向格（「へ」）をその基本的機能とするため、奪格（「から」）とは意味的に矛盾するからである。一方、日本語の「を」は、いわゆる文法格であり、述語とともにその具体的な意味機能を決める。すなわち、述語の意味に応じて様々な意味機能に変化する。一方、ビルマ語では、主語や目的語は「格助詞なし」が通常であり、強調する時や目的語を主語と区別する時、主語であれば **-ka.**、目的語であれば **-ko_** を補助的に用いる。この二つの格助詞は、元来、奪格と向格を表すいわゆ

る意味格であり、主語や目的語を表示する専用の格助詞ではない。つまり、日本語では、文法格と意味格が分化しているが、ビルマ語では意味格が文法格に流用されており、両者が分化していないと言える。そのような格体系の違いが、例(7)のような相違を生み出していると考えられる。

以上のことから、格助詞の意味機能の特定において、ビルマ語は、動詞等、文中にある別の要素に依存する程度が日本語より大きい。これは、日本語の格助詞の自立性は高く(強く)、ビルマ語の格助詞の自立性は低い(弱い)と言い換えることができる。

3.1. 壁塗り交替と餅くるみ交替

日本語には「壁塗り交替」と「餅くるみ交替」と呼ばれる格助詞の交替現象がある。いずれも「～に～を」の組合せが「～を～で」の組合せに交替する。両者の違いについて、川野(2012)は次のように述べているⁱⁱ。壁塗り交替と餅くるみ交替の違いは、対応する格成分の組み合わせにあり、前者は、(9)で示したように、「～に～を」形の「に」格句と「～を～で」形の「を」格句が対応し、「～に～を」形の「を」格句と「～を～で」形の「で」格句が対応するという形で交替が起こる。これに対し、餅くるみ交替では、(10)のように、「～に～を」形の「に」格句と「～を～で」形の「で」格句が対応し、「～に～を」形の「を」格句と「～を～で」形の「を」格句が対応するという形で交替が起こる。

(9) 「壁塗り交替」

a. 壁に ペンキを 塗る。

b. 壁を ペンキで 塗る。

～に	～を	塗る
⋮	⋮	
～を	～で	塗る

(10) 「餅くるみ交替」

a. 桜の葉に 餅を くるむ。

b. 餅を 桜の葉で くるむ。

～に	～を	くるむ
X		
～を	～で	くるむ

壁塗り交替における「～に～を」形と「～を～で」形は一見同義に見えるが、前者は位置変化を示し、後者は状態変化を示す。例えば、(9)a.の「壁にペンキを塗る」は、ペンキを壁以外の場所から壁へ移すこと（すなわち、ペンキの位置変化）を表すのに対し、(9)b.の「壁をペンキで塗る」は、壁の様子を変化させること（すなわち、壁の状態変化）を表す。また、川野(2012)は、餅くるみ交替の場合、「～を～で」形の「を」格句と「で」格句はそれぞれ、「～に～を」形の「を」格句（位置変化対象）と「に」格句（着点）に対応すると述べている。高見・久野(2014)は、日本語では、「を」格名詞句が動詞の表す動作・作用の全面的・直接的影響を受け、「に」格や「で」格名詞句は動詞が表す動作・作用の部分的・間接的影響しか受けないと解釈されると述べている。

これらの二種類の交替現象は、ビルマ語でも可能だろうか。

(11) ビルマ語の「壁塗り交替」

- a. naN_yaN_hma_ she:go_ Tou' tE_
 壁 - hma_ ペンキ -ko_ 塗る
 「壁にペンキを塗る。」
- b. naN_yaN_go_ she:nE. Tou' tE_
 壁-ko_ ペンキ-nE. 塗る
 「壁をペンキで塗る。」

例(11)を見ると、ビルマ語でも日本語の壁塗り交替と同じ現象が存在することが分かる。しかしながら、ビルマ語では、高見・久野(2014)が日本語について指摘している意味解釈の差が見られない。ビルマ語では、(11)b.の格パターンが好まれ、さらに、-ko_格（「を」格相当）名詞が文脈によって全体的影響を受けるという解釈にも部分的影響しか受けないという解釈にもなる。この解釈に関する両言語の差異は、例(1)～(6)と同じように日本語の格助詞はその自立性が高いため、格交替によって、意味的な対立が生じるのに対し、ビルマ語の格助詞は、自立性がそれほど高くないため、一つの格パターンがいずれの解釈も許すという緩い対立になることに起因すると考えられる。また、日本語の「を」格名詞が動作・作用の全体的・直接的影響を受けると解釈されるのに対し、ビルマ語の-ko_格名詞はその解釈に縛られないのは、「を」格は動詞と強く結びつく文法格であるが、-ko_格は文法格として独立した地位にないことと関係していると考えられる。そして、ビルマ語で(11)a.よりも(11)b.が好まれるのは、格助詞-hma_が日本語の「に」と「で」のように分化していないため、壁がペンキの所在場所（「に」に相当）なのか、主語が動作を行う場所（「で」に相当）なのかが判別できない場合があり、(11)b.に比べ、(11)a.は“使い勝手が悪い”からではないかと思われる。ここにも両言語の格体系における細分化の度合いの違いが垣間見られる。

餅くるみ交替については、日本語の(10)a.を直訳したビルマ語の(12)a.は、不可であり、(10)b.に相当する(12)b.のみが可能である。

(12) ビルマ語の「餅くるみ交替」

- a. *chE_ri_paN:ywE'hma_ kau'hniN: go_ thou' tE_
 桜の葉 -hma_ 餅 -ko_ くるむ
 「桜の葉に餅をくるむ。」
- b. kau'hniN: go_ chE_ri_paN:ywE'nE. thou' tE_
 餅 -ko_ 桜の葉 -nE. くるむ
 「餅を桜の葉でくるむ。」

ところが、(12)a.において chE_ri_paN:ywE' 「桜の葉」という表現に thE: 「(～)の中」という表現を付け加えるとビルマ語でも文法的になる。

- (12) a'. chE_ri_paN:ywE' thE:hma_ kau'hniN: go_ thou' tE_
 桜の葉の中-hma_ 餅 -ko_ くるむ。
 「桜の葉に餅をくるむ。」

なぜこのような差が出て来るのだろうか。これには、モノ名詞とトコロ名詞が厳格に区別されるというビルマ語の特徴が関わっている。ビルマ語の文法において、名詞が「トコロ名詞」か否かについて常に意識しなければならない。例えば、-ka.が奪格の機能を示すとき、それで標示される名詞はトコロ名詞でなければならない。

- (13) a. Tu_ga. japaN_ga. la_dE_
 彼-ka. 日本-ka. 来た
 「彼は、日本から来た。」
- b. Tu_ga. TangE_jiN:shi_ga. IE'shauN_ya.dE_
 彼-ka. 友達*(のところ)-ka. プレゼントをもらった
 「彼は、友達からプレゼントをもらった。」

名詞 japaN_ 「日本」は、もともとトコロ名詞であるため、奪格の-ka.を直接付加することができるが、TangE_jiN: 「友達」はモノ(ヒト)名詞であり、トコロ名詞でないため、shi_ 「ところ」という要素を付けて明示的に「トコロ化」して、はじめて奪格の-ka.を接続することが可能となる。

さらには、場所を示すことがその基本的機能である格助詞-hma_においてでさえ、それに先行する名詞がトコロ名詞でない場合は、通常、「トコロ化」が要求される。以下の例において、「～の上」や「～の中」という表現がなければ、例え、文脈から意味が判断で

きるとしても、それらは非文となる。

- (14) a. zabwE:**bo**_hma_ bagaN_go_ tiN_dE_
 テーブル*(**の上**)-hma_ 皿-ko_ 置く
 「テーブルの上に皿を置く。」
- b. khwE'**the**: hma_ ye_go_ phye.dE_
 コップ*(**の中**)-hma_ 水-ko_ 入れる
 「コップの中に水を入れる。」

先のビルマ語の餅くるみ交替の例(12)に話をもどすと、「桜の葉」はモノ名詞であり、道具になることはできるが、そのままでは場所にならない。つまり、「桜の葉」は道具を表すモノ名詞として-nE.の付加は可能であるが、トコロ名詞ではないため、-hma_を直接付加できない。それゆえ、ビルマ語では、格助詞を単純に入れ替えただけでは、餅くるみ交替は「完成」しないのである。従って、-nE.が-hma_に交替した際は、(12)a'のように、当該の名詞を明示的にトコロ名詞化しなければならない。

川野(2012)は、餅くるみ交替で現れる「～に～を」形の「に」を着点を表すと位置づけている。つまり、日本語でも「に」を伴う名詞は、場所を表している。しかし、日本語の餅くるみ交替では、単に格助詞を入れ替えるだけですむ。ビルマ語のように、「に」格名詞に「中」などの表現を付加して、当該の名詞が場所になっていることを明示しなくてもよい。これは、日本語では、モノ名詞がそのままトコロ化していることを示しているのではないだろうか。もしそうだとすると、ここでも、両言語の格助詞の機能・体系の違い、そして、そこから派生する格助詞の自立性が関係していると考えられる。つまり、日本語では、於格の「に」がモノ名詞をトコロ表現に変換できる“強さ”を持っているのに対し、ビルマ語の於格の-hma_は、そのような“強さ”を持っていないため、モノをトコロ化するには「～の中」などの明示的な表現が必要になると考えられる。先に自立性が高いというのは、格助詞が自己主張しているということだと例えた。つまり、この場合、「に」格は於格の機能を表していることを自立的に強く主張しているため、「桜の葉」自身はトコロ名詞化しなくても、存在場所であることは、「に」格によって保証される。一方、ビルマ語の格助詞は、自分だけでは、「桜の葉」をトコロ名詞に変えるに十分な自立性、つまり、強さを持ち合わせていないため、「～の中」などの明示的な表現の助けが必要になるのである。

4. おわりに

本稿では、日本語とビルマ語の格交替において観察される文法性や意味解釈の相違は、日本語の格助詞が高い自立性を有するのに対して、ビルマ語の格助詞は自立性が低い

ことに由来するとの提案を行なった。そして、この自立性の度合いの違いは、日本語がビルマ語よりも多くの格形式を備え、格機能を細分化させていることから生じていると主張した。さらに、日本語は文法格と意味格を分化させているが、ビルマ語では、意味格がその機能を維持しながら、補助的に文法格に流用されていると指摘し、そのような相違も両言語に観られる格助詞の交替現象の差異に関与しているとの考えを示した。日本語とビルマ語は、文法構造が類似しており、格機能が助詞によって表示される点も共通している。しかし、同じように格が交替していても、その文法的・意味的な側面も類似しているとは限らない。そのような差異をもたらす要因を探る際には、格体系の全体像も視野に入れて考察する必要がある。

【参考文献】

- 大野徹(1983)『現代ビルマ語入門』誠隆印刷。
- 岡野賢二(2007)『現代ビルマ語文法』国際語学社。
- 岡野賢二(2010)「ビルマ語の格標示」『チベット＝ビルマ系言語の文法現象1：格とその周辺』, pp.239-268. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- 加藤昌彦(2013)「ビルマ語発音表記の一例」ms.
- 加藤昌彦(2015)『ニューエクスプレス ビルマ語』白水社。
- 加藤重広(2006)『日本語文法 入門ハンドブック』研究社。
- 川野靖子(1997)「位置変化と状態変化動詞の接点—いわゆる「壁塗り代換」を中心に—」『筑波日本語研究』2, pp.28-40. 筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室。
- 川野靖子(2002)「自動詞文における二種類の代換現象と所有関係—「N1 ガ N2 デ〜」「N1 ガ N2 ニ〜」を中心に—」『日本語文法』2巻1号, pp.22-42. 日本語文法学会。
- 川野靖子(2004)「「桜の葉に餅をくるむ」と「餅を桜の葉でくるむ」—壁塗り代換との関連性—」『香椎潟』50, pp.1-14. 福岡女子大学国文学会。
- 川野靖子(2006)「現代日本語における位置変化構文と状態変化構文の交替現象—格成分の対応の仕方—」『日本語の研究』第2巻1号(『国語学』通巻224), pp.32-46. 日本語学会。
- 川野靖子(2009)「壁塗り代換を起こす動詞と起こさない動詞—交替の可否を決定する意味階層の存在—」『日本語の研究』第5巻4号(『国語学』通巻224), pp.47-61. 日本語学会。
- 澤田英夫(1999a)『ビルマ語文法(1年次)』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- 澤田英夫(1999b)『ビルマ語文法(2年次)』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。

- 鈴木孝明 (2015) 『日本語文法ファイル-日本語学と言語学からのアプローチ』 くろしお出版.
- 高見健一・久野暲 (2006) 『日本語機能的構文研究』 大修館書店.
- 高見健一・久野暲 (2014) 『日本語構文の意味と機能を探る』 くろしお出版.
- 塚本秀樹 (1991) 「日本語における格助詞の交替現象について」 『愛媛大学法文学部論集. 文学部編』 .vol.24, pp.103-127. 愛媛大学法文学部.
- 仁田義雄 (1993) 「日本語の格を求めて」 『日本語の格をめぐる』 くろしお出版.
- 日本語記述文法研究会編 (2009) 『現代日本語文法 2 第 3 部格と構文 第 4 部 ヴォイス』 くろしお出版.
- 益岡隆志・田窪行則 (1987) 『格助詞』 くろしお出版.
- 藪司郎 (1990) 「ビルマ語と日本語」 近藤達夫編. 『講座日本語と日本語教育第 12 巻言語学要説(下)』 , pp.326-347. 明治書院.
- Thu Thu Nwe Aye (2016) 「日本語とビルマ語における格助詞の機能及び体系に関する対照研究—格助詞の交替現象を中心に—」 (大阪大学大学院言語文化研究科修士論文)

ⁱ ビルマ語のローマ字転写は、原則、加藤(2013)に倣う。ビルマ語は日本語と同じ膠着語であり、格も同じく、助詞（接尾辞）によって表される。これらの助詞類は-ka_→ -ga_、-ko_→-go_、-tE_→-dE_等のように有声化が起こる場合がある。

ⁱⁱ 川野(2012)は「壁塗り代換」と呼んでいるが、本稿では「壁塗り交替」という名称を用いる。